

〔研究ノート〕

震災救援の最前線に立った中学生たち（その1）

1925年北但震災における旧制豊岡中学生たちの
救援奉仕活動の作文記録を発掘して

編著者 深井 純一*

共同編集者 岸田 秀樹**

本稿は去る75年前の1925（大正14）年5月に、兵庫県豊岡・城崎を中心とする地方に発生した北但震災の際に、被災者の救援活動の先頭に立った旧制豊岡中学校（現・豊岡高校）生徒596人の活動と今後の復興への決意を綴った作文集を深井が発掘し、上記の岸田の他、末尾記載の諸君⁽¹⁾の協力を得てその編集作業を完了したので、その作文を紹介することを主眼としている。この作文集を今日刊行する意義は2つある。まず第1に近年の阪神・淡路大震災において、淡路島では各世帯と地域社会が都市に見られない耐震性を発揮したことが注目された。そのような農漁村・地方小都市における震災の被害・救援・復興の特質と問題点を、この作文集の生々しい記述から抽出することである。第2には阪神・淡路大震災の直後にナホトカ号の福井県三国町沖座礁事件などが続発する過程で、高校生を含む若者たちのボランティア活動が注目を浴び、近頃ではその種の活動を義務化することが検討されている。現在の中学1年～高校2年に該当する旧制中学生たちが、どのような思いで救援活動の最前線を担ったのかを、そのような今日的な視点と比較しつつ、検討することである。

キーワード：北但震災，旧制豊岡中学生，鳥取高等農業学校生，救援奉仕活動，作文記録，ボランティア

はじめに

（1）農村部震災調査の理論枠組みを模索して

深井は1995年1月の阪神淡路大震災に関して、淡路島における今回の被害・救援・避難・復興の諸側面をめぐる調査を、1995年春から1997年にかけて有志の学生諸君とともに進めていた過程で、改めて痛感させられたのが地方都市・農山漁村における震災の社会科学的研究

の理論枠組みの不明確さであった。

震災の社会科学的研究はその自然科学的研究のはるか後塵を拝しているが、それも関東大震災に伴う東京・横浜などの大都市の事例調査にとどまっていて、地方都市・農漁村における事例調査はきわめてまれである。今回の阪神・淡路大震災においても震源地が淡路島一宮町であったにもかかわらず、淡路島へ調査研究に赴いたのは無数に上った調査団のうちのわずか2～3にとどまったことにも如実に示されている。日本の震災研究が大都市に限定されているとい

* 立命館大学産業社会学部教授

** 立命館大学非常勤講師

う偏りは少しも是正されていないのである。

（2）関西近辺の6つの震災事例に着目して

そこで深井は、過去の地方都市・農漁村（以下農村または農村部と略す）における震災（以下農村型震災と呼ぶ）の事例を遡及してみる必要性を痛感した。

調査の主な対象として取り上げたのは東海・中四国を含む関西近辺で、関東大震災以後第二次大戦直後までの期間に発生した事例に限定した。関西近辺に限定したのは資料収集の時間と経費の制約のためであり、この時期への限定は、戦中ないし占領中で情報が公開されず、調査研究も遅れていると考えたからである。具体的には関東大震災の2年後の1925（大正14）年5月の北但馬震災、1927（昭和2）年の北丹後震災⁽²⁾、1943（昭和18）年の鳥取震災、および広範な津波被害を伴った1944（昭和19）年の東南海震災と1946（昭和21）年の南海震災、さらには1948（昭和23）年の福井震災に関する史料収集に着手した。このうち福井を除く5事例については1995年12月末から現地へも赴き、かなり多数の史料を集めることが出来た。その他、概観的補足を行うため三陸津波・三河・新潟・十勝沖・宮城県沖・日本海中部・長野県西部などに関する史料収集も進めつつある。

（3）旧制豊岡中学校生徒の作文発掘の契機

本研究の価値を支えていると思われるのは、膨大な量に上る旧制兵庫豊岡中学校の生徒たちの作文記録であろう。その発掘に至った経過を始めに記しておくことにしよう。

深井は1995年12月末に2泊3日間の日程で兵庫県豊岡市・鳥取市・京都府宮津市の図書館

を訪問した。その時期は各図書館の年末年始の閉館間際だった。最初に訪問した豊岡市立図書館は新築工事中で、市民会館の3階に間借り中の狭いスペースを余儀なくされていたが、そこにおいて深井は予想もしなかった幸運に巡り合うことが出来た。一般に公立図書館では貴重な郷土資料は書庫に収められて、手に取って内容を確認するには1冊ずつ閲覧請求しなければならないことが少なくないのだが、当館では深井の依頼を快く受け入れ、書庫内に入り込んでの郷土資料一切の精査を認めて下さった。私は書庫の冷たいコンクリートの床に半日座り込んで、薄い未製本の冊子が多い郷土資料を1冊ずつ取り出しては、すべての頁をめくって内容を確認していく作業を心置きなく進めることが出来た。

その作業の過程でふと手にした県立豊岡高校発行の『豊高創立八十周年記念誌』の108頁に、「中学校在校生の震災についての作文」を紹介した1枚の小さな写真が掲載されており、その文面は判読不可能であったが、そのような作文集が必ずや存在するに違いないと確信することが出来た。

早速図書館からほど近い同高校を訪ね、作文集の閲覧を希望したが、石田校長をはじめ当時の同校の教職員のうち、その作文の存在を知っておられる方は皆無であった。前掲記念誌の編集委員を訪ねて、前記の写真のいわれを問うのが筋道だったのであろうが、幸いその当時の図書室担当だった佐伯武彦教諭が、「図書室内を探してみましよう」と、わざわざ足を運んで見つけて来て下さったのが、積み上げて20cmほどになる作文集であった。

それは震災救援活動に参加した生徒たち全員の書いた『震災に関する日記』（1年生）、『震

災に関する行動』（2～5年生）『震災の感想と覚悟』（1～5年生）、および『震災救援記録』（講習生）から構成されていた。鉛筆で手書きされた薄い上質のB4判の和紙の罫紙（けいし）を、二つ折してこよりで和綴したものであった。なお講習生とは1923（大正12）年に同校に併設された尋常科小学校教員養成講習所の生徒を指しており、30名の作文が残されている。

同校は1972年に出火した未明の火災で校舎の大半を焼失する被害に遭っているが、後に伊吹教諭からお聞きしたところでは、作文集は他の図書類とともに図書館から、生徒たちのリレーで無事に運び出されたという。

作文は短時間で複写できる量ではなかったので、年明け早々の再訪を約して同校を後にした。

（4）鳥取大学付属図書館での思わぬ収穫

予定通り豊岡を1日で切り上げて、その日の夕方の山陰本線の列車で鳥取駅へ向かったが、降り続く大雪に加えて強風のために列車は、先ごろ突風による転落事故を発生させた余部鉄橋が不通となり、連絡バスを乗り継いで深夜に白銀の鳥取駅に到着した。翌朝は複写に制約の多い鳥取県立・同市立などの公共図書館を後回しにして、鳥取大学付属図書館へ向かった。

鳥取大学付属図書館でも素晴らしい収穫が得られた。深井が目指していた鳥取震災に関しては目ぼしい資料は見つからなかったが、北但震災への救援活動の記録が入手できたのである。同大学で最も古い中心学部である農学部の『創立五十周年記念誌』その他に、同校の前身・鳥取高等農業学校生たちが学校当局の禁止令を無視して、北但震災によって不通となった山陰本線の復旧を待って農具を携えて列車に乗り込

み、全焼の憂き目に遭った城崎温泉への救援行動に出かけた史実の記載部分を複写することが出来た。また同校同窓会記念誌にはその救援活動への参加者の回想記も掲載されている。詳細は後に改めて紹介するが、禁令を犯した学生たちを処分しようとした学校当局は、やがて送られてきた兵庫県知事の感謝状を目の当たりにして、処分の方針を撤回することにしたという。

鳥取ではその日の夕方、新築されたばかりの県立図書館へ立ち寄って各市町村史を参照し、鳥取震災関連の記事を複写したが、目ぼしい内容のものは見当らなかった。

1. 中学生による救援活動をもたらした諸要因

（1）大規模な寄宿舎を不可欠とした豊岡中学校

兵庫県下で最も早く旧制中学校が開設されたのは1978（明治11）年の姫路中学校で、豊岡中学校は神戸第一中学校とともに1893（明治26）年に県下で2つ目に創立されている。

しかし当時山陰本線は京都～園部間が京都鉄道(株)によって、また播但線は姫路～生野間が播但鉄道(株)によって建設されたのみで、同校の学区内には鉄道は敷設されていなかった。それゆえ同校へ徒歩ないし自転車で通学しうる豊岡・城崎・出石などの近傍町村在住者を除いては、下宿するかしかなかった。開校当時は正規の寄宿舎もなく、豊岡町内の徳證寺を仮の寄宿舎として借りていたが、民家へ下宿する生徒も少なくなかった。山陰本線が学区内を全通するに至ったのは1912（明治45）年のことであった。

しかしその後生徒定員も明治の創立期の300人が大正期には450人から500人へ、さらには750人へと急増し、校舎と寄宿舎も増築を重ね

て、震災当時は寄宿舍も2棟を擁するに至っていた。そして震災発生と同時に山陰本線は不通となり、多くの寄宿舍生や下宿生が帰郷することが出来なくなった事情も重なって、大勢の救援部隊が形成される環境が偶然に整ったのである。

それゆえに旧制豊岡中学校や豊岡小学校などの教師・生徒・児童、あるいは鳥取高等農業学校の学生たちが、軍隊や消防団の重要な代役を務める結果となった。今日でも豊岡高校内に聳え立つ和魂碑に象徴されるように、日常の学校での規律と鍛錬の成果が生かされたことも見逃せない。しかしいわゆる軍事教訓の経験は長くなかった。「宇垣軍縮」と通称される4個師団の削減によって生じた余剰軍人が、各学校に軍事教練の指揮官として配属されたのは震災の前月で、豊岡中学校にも徳田大尉が赴任したばかりであった。

しかし生徒たちの強い愛郷心と、当時は誰も持っていた社会奉仕の精神が発揮されたであろうことも見逃してはなるまい。

その他では天理教・キリスト教・仏教など各宗教団体などの奉仕活動が目目される。

（2）農漁村・地方小都市の震災発生時に主力救援部隊が存在しなかった事情

今日でも大災害の際の主力救援部隊は、「災害救援」を掲げた自衛隊であるが、当時においては今日にも増して地元出身兵士の入営する近傍の陸（海）軍師団・連隊、次いで県内各市町村の在郷軍人会とそれに指揮された青年団・消防団が中心を占めていた。しかし彼らは鉄道不通のために主に徒歩でやって来た。それゆえ震災直後の丸1日余りは、震災現地には大規模な救援部隊が存在しなかったのである。

ところで当時の地元の農漁村や地方小都市の兼業の消防団は、人員も少なく機材も不備で、一度出火してしまうと容易に消火しえなかった。団員が自宅の防火・消火に追われてしまう事情もあった。今日のような常設消防は東京などの大都市を除いてはまだ存在していなかった。

2. 本連載に収録する資料とその校正方針

歴史的資料の採録は原文に忠実に行うのが一般的な原則であるが、本連載では文体は漢語調を現代の口語文に改め、漢字と送りがなは常用漢字にとどまらず新聞用語にまで平易化することを、編集の基本方針とした。それは今日の高校生諸君に本稿を読んでほしいと願っているからに他ならない。

この結論に到達するまでもに紆余曲折があったし、どこまで原文の文体・文字を残しつつ、この編集方針と調和させるかをめぐって私たちは多大の時間と労力を費やした。

深井は全ての原稿の校正に関わったが、その事前事後に岸田を始めとする製版従事者2人による重複校正が行われ、校正のミスや誤植をなくす努力が重ねられた。原稿発掘以来6年になろうとしている作業の遅延の主因は、この作業の煩雑さにあった。なお本稿を単行本として刊行することを目ざしたが、当面困難なので本論集に分割して連載していくことにした。今後の続編掲載に当たっては、当時の時代背景や救援・復興に関わる多面的な概説を前段に掲載していくことにする。最終的にはこれらの概説を前半に掲載して、後半を作文集の掲載に当てる体裁で単行本の刊行をめざしたい。

この作文集を1995年末に発掘した経過は前述した通りであるが、翌年2月に深井は同高校

表 北担地震の主な被害

	町 村 名	戸数	焼失	全壊	同%	半壊	破損	計	人口	死	傷
兵 庫	豊 岡	2,178	1,483	489*	25	30	122	2,124	11,097	87	293
	八 条	368		13	4	42	224	279	1,910	2	7
	神 田	480		28	6	121	301	450	2,449	1	3
	三 江	408		15	4	50	225	290	2,527		8
	田 鶴 野	444		102	23	118	208	428	2,311	8	13
	五 荘	677		56	8	20	421	497	3,293	5	9
	内 川	305		61	20	50	79	190	1,642	11	13
	城 崎	702	548	30	50	10	16	604	3,410	272	198
	港	813	148	438	72	142	3	821	4,434	33	243
	竹 野	648		31	5	61	199	291	3,540		8
京 都	中 筋	498	1	8	2	40	254	303	2,761		4
	中 竹 野	405				11	394	405	2,531		
	香 住	1,055					53	6,135			
	口 佐 津	528		1		5	368	374	3,326		4
	国 府	701		3		23	309	335	3,370	2	1
計			2,180	1,295		773	3,266	7,514		428	834

（宇佐見龍夫著『日本被害地震総覧』235頁より）

の同窓会名簿を手がかりに、生存していると思われる80歳代の方々全員に、当人の作文のコピーを送り、自らの作文への感想といまなお記憶している当時の震災の状況、さらには阪神・淡路大震災への感想を返信して下さるよう依頼していくことにした。多くの方々丁寧な返事を下さった。それらも各自の作文に添えて掲載していくことにした。

さらに震災71周年に当たる1996年の5月には、豊岡・東京・神戸の3個所で生存者に呼びかけて座談会を開催した。東京は2人、神戸では1人しか参加していただけだったが、豊岡では同窓会・達徳会が当時の各学年から参加者を選んで9人が出席して下さり、今の在校生代表2人の生徒の出席も得て盛況であった。その座談会記録も本連載の後半部分に収録している。

また1997（平成9）年5月には、北但・丹後地方の生存者を訪ねての聞き取り調査を実施した。全員を訪ねるまでには至らなかったが、その結果も当人の作文に付けて掲載した。

原資料は各学年とも2分冊から成っており、おおむね『震災に関する行動』と『感想と覚悟』という表題を付されている。前者は以下の質問に答える形で書かれている。

- （1）地震が起こってから後、二十三日中にどんな行動をしたか。
- （2）二十四日から後、毎日どんな行動をしたか順次書きなさい。
- （3）地震が起こってから後、他人の行い、特にわが校の生徒の働きについて、感心したことをくわしく書きなさい。

紹介資料では『震災に関する行動』（2～5年生）と『震災に関する日誌』（1年生）は〔行動と日誌〕、『感想と覚悟』は〔感想と覚悟〕と表題を付し、講習生に関しては内容に応じて作文を両方に分割し、五年生から学年順、五十音順に同じ筆者の作文を併載していくことにする。

行動と日誌 五年 赤江 吉一

一．学校から帰り、直ちに家へ帰って来れば、家人はいないから家人を捜し、家の安全なのを見て、友達と新屋敷の知らない他人の家へ行って、手当たり次第に家財を出して川岸へ運んだ。またポンプの所で少し仕事をして、片山先生の家財を出し、徳田先生の家へ行くともう済んでいた。

家に帰るとわが家の近くまで焼けていたので、急いで家財を出せるだけ出し、家が焼けてから中学校へ来て夕食を食らった。その晩は疲れて、家財の置いてある道端に、毛布を着て奥村と二人で寝た。

二．二十四日 家財を一時他人の家へ預けるために、一日中車に積んで運び、夜中学校へ来た。夕食を食らい、その夜は奥村の家へ寝た。

二十五日 朝長く寝て、正午城崎へ奥村とともに行った。夜の八時に帰り、その夜は他人の家へ寝た。

二十六日 大阪の親類の人とまた城崎へ行き、親類を訪ねたが分からず、その人の無事を聞いて帰り、家の焼け跡へテントを建てるのを手伝った。夜はテントの中に寝た。

二十七日 以後、何もすることがなく、家の雑用を手伝い、毎夜テント内に

寝た。

三．最初の二十三日、僕の家の焼けた直後に、信部・福富・河本・西垣・奥村らの友達が来て、半ばぐらいの家財や道具を出してくれたこと。

感想と覚悟 五年 赤江 吉一

幾多の歴史を持つ豊岡も、ただ一時の間に見るも悲惨な焼け野となり、多くの生命と財産を一塊の灰にした。二十四日の夜更け、一夜の宿を借りようと友の家へ行く道すがら、豊岡の繁華を競った美しい街も今は焼け野となり、昨日の火が未だ消えないで、大震災を恨むかのように赤く青くチラチラと炎を吹いている。

人一人通らぬ原に銃剣物々しい兵士の姿、所々に見える警官の提灯を見る時、先の東京の大震災もこのようであったろうと思われる。空には無数の星が平常と変わらず輝いている。一種言うに言われぬ異様な臭気が鼻を刺す。

電灯一つともらぬ町外れの倒れかかった家の軒下を通過して、円山川に架かる橋まで来ると、川水も増さず減らず、水音静かに流れる橋の下に、避難民の舟らしくローソクの灯がチラチラとして、女・子供が身を横たえている。

川向こうには夜警のかがり火がボーッと赤くたかれ、人の顔を明るく照らしている。「また兵士がここにも一人」と、思わず身が引き締まるのを覚える。橋を過ぎると友の家の人たちも全員屋外へ出て寝ている。村人が二、三人、かがり火に寄り掛かりながら、色々の評判をして「今夜の二時にまた余震が来るそうだ」などと言っている。

友と二人、夜露にしっかりと濡れた草の上へ横になり、銀の砂のように輝く星を眺め、考えるとはなしに昨日のことを思い浮かべた。目は次第に冴え、服がジメジメと湿り、思わず寒さ

に身震いした。

月影一つ見えぬ空から流星が一つ、空のかなたへ流れた。色々と連想から連想へと、ついに自分の身を考え、家のことを思った時、漠然として頭の中がゴツチャになり、昨日の震災も夢見るようである。

暖かい夢を見るのに寝る家もないことを思うと、言い知れない不安な思いに気持が沈みそうにもなるが、星がまたたく広い宇宙の大天地を眺めた時、また一種の痛快な気分が満ち満ちて、こぶしに力を込めて新しい生命が広げられ、不安な思いも取り去れそうになる。しかしまた一方に父母を思うと、泣きたいような気持ちになる。

この朝人々が家財を焼き、身体を傷つけ、生命を奪うこの震災をのろうように避難所で泣いているさまが浮かぶ。……身が夜露で冷える一方であるから、友と二人で思い切って友の家の二階に寝た。もう真夜中らしい。

〔通常は家の中で飼われているのだが、〕家の中が危険と見えて友の家の桑畑につないである牛が、フウフウと大きないびきをかいている。短いローソクに灯をつけて窓を開け放ち、震災の二日目の夜になって初めて、暖かい布団の上にな身を休めることが出来た。

友ははや昼の疲れにスースーと寝てしまった。考えまいと思っても次から次に先々のことが思いやられる。どうせ今まで通りの自分ではいけない。もっともっと努力せねばならないと思いつつも、友と同じように昼の疲れに何も分からなくなり、ついに寝てしまった。

行動と日誌 五年 足立 鉄雄

一．気持の悪い灰色のような空を見ながら登校した。何となく息苦しく、世界の終りのような

感があった。昼前、立体幾何の授業中、突然大地震が来た。運動場に集合した後、自宅に帰るために豊岡駅へと急いだ。汽車は不通であった。

駅通りの惨害を見ては助力せずにはいられなかった。あの当時の平たくつぶれていた家屋の中から、ウンウンうめいていた人のことが、どうしても思い浮かんで来る。二時間一生懸命働いたつもりである。鉄道伝いに江原まで徒歩で行き、六時の汽車で帰る。ほとんど眠らず。

二．二十四日 郷里にて慰問品の受付・発送の手伝いをした。

二十六日 登校。

二十七日 登校，学友を慰問す。

二十八日 登校，働いた。

二十九～三十一日 自宅にて（中断）。

三．全部感心した。

感想と覚悟 五年 足立 鉄雄

思えば大正十四年五月二十三日、但馬の一角に起こった大地震は、今や全盛を極めようとしていた但馬の都市を、一たびの大自然の怒りによって、さながら暴威の後の悲惨な痕跡のみをとどめて、その焼け野原の上を、陰気で殺伐とした血なまぐさい風が吹きすさんでいる。

焼け残った寺院の鐘突き堂の先端に、止まって鳴く鳥の声を聞くにつけても、悲痛をそのまま表現しているようである。またしても過ぎた日の恐ろしい幻影が浮かんで来る。

煙幕に包囲されて逃げ惑う声、破壊された人家の中から助けを求めらうめき声、傷ついた幼児を抱きしめて泣き悲しむ声などを思うと、実に頭髪が逆立つような感を覚えないではいられない。

震災は日本中に伝えられた。消防夫・救護班

など、それぞれ特有の記号を付けた人々の群で大混雑を極めた。食の欠乏で苦しむ人民および傷病者などを始め、あらゆる遭難者を助けるために、急いで集まる多数の人々の人情の美しさよ、それは永久に但馬震災のローマンスとして、語り続けられることであろう。

しかし我々はむやみに悲観のみしてはいけけない。落胆のみしてはいけけない。人に頼ってはならない。復興に！再興に！我々の進む道は一筋だ！のろわれたこの北端の都会の、過去以上の進歩と発展を図らねばならない。

おゝわが仲間よ、奮え！闘え！そうして全身より玉のような汗をわき出させよ。そしてそれを結晶させよ。

見よ！焼け野の中から〔草木が〕若芽を盛んに出しつつあることを！秋に落ちた木の葉も間もなく青々と茂って、緑がしたたるかのようになるではないか。

一度社会のどん底に落とされた人生は必ず立ち直って、より立派な花を咲かせる可能性を持っていることは、あらゆる人に認められている永久の真理ではないか。

行動と日誌 五年 井垣 次光

一．まず下宿に帰ってみると、家は壁にひびが入っているくらいなものであったので、書物を出し、下宿屋の荷物運搬を手伝った。そうしているうちに豊岡の北端部に起こった火事が、勢いを得て避難先にもやって来ようとする形勢だったので、安全地帯に再び運搬した。

その晩は余震におののきながら、〔家の外で〕露の上に夢を結んだ。但し熟睡したのは一時間。

二．二十四日 太陽は霧の中に出た。自宅が心配だったので八時ごろ家に帰り、その日は自宅にいた。自宅は比較

的安全だったので、八時ごろの汽車で豊岡に来て中学校に行き、手伝った。

二十五日 午前中焼け跡見物、午後中学校に来て手伝った。

二十六・二十七・二十九日 自宅にいて、何もせず。

三十日 豊岡に来て小学校に行き、手伝った。

三十一日 城崎の震災跡見物。

三．自宅にいたため、知らず。

感想と覚悟 五年 井垣 次光

大地のわずか六センチ余りの震動によって、繁栄を誇った但馬の東京である豊岡町、家屋の高層を誇った城崎町はこれほどに無残に、三、四時間の後にはすでに焦土と化してしまったのである。それと同時にこれらの町の人の中には、希望も財産も失った人が幾人あることか。

何と自然の力は偉大なんだろう。何とサイエンスの進歩のブアなことよ。このような大事が突発する一時間前に予言できないのか。ニュートンのような大科学者でも、「我々はちょうど、真理の海の浜で貝を持って遊んでいるわら



豊岡小学校校庭の避難民。上方はまだ燃え続けている。

（『豊岡市史』下巻359頁より）

わのようである」と言っている。真理の海の果てしなく広いことよ。

すなわち私は今度の震災に関して第一に感じたことは、自然の力がどれほど大きいのかということである。この震災によって我々の学校は十日間も休校になったのだ。すなわち十日間を棒に振った訳である。言い換えれば、生存競争に十日間遅れた訳である。

この未曾有の大変異は我々、否この但馬地方の人にとって、大打撃であったにちがいない。しかしこんなことぐらいで挫折してはいけない。あくまで努力せねばならない。心機一転した訳である。

ある見地から言えばこの大震災は、この但馬地方のだらけた空気を一掃して、努力を促した天の賜物であるかも知れない。焦土の上に精神・物質両文明の大殿堂を建設すべきである。

若きロマン・ローランは叫んでいる。「勇躍して突破せよ。断じて休んではならない。お前は男だからである」と。この際まさにこの心掛けがなければならない。

行動と日誌 五年 井垣 鉄郎

一．学校から直ちに家に帰ったが、家は安全であった。それ故に永井にある親類の家に行ったが、幸いに倒壊を免れていた。しかし前の家が盛んに焼けているので、類焼の警戒をした。火事もやや安全になった。

そのころ、〔川〕下の方向に炎々と燃え上る炎を見て、直ちに駆けつけて消火を手伝い、火の手が次第にわが家に近づくので、家のための仕事に従事した。少々の物品を持ち出した。我々は中学校庭に避難し、この日はそこに野宿した。

二．二十四日 荷物の取りまとめを昼までに終え、その後は親類の子供を捜し歩

き、とうとう分からず、一日は終わった。

二十五日 避難所を移転するのに昼まで費やし、また子供捜しに出てようやく立野で見出した。夜は早く就床した。

二十六日 寺区の仕事に従事した。

二十七日 地震もやや収まって、火事場から持ち出すことの出来た物品は九日市の親類に運び、その後は焼け跡を歩いた。

二十八～三十一日 記憶なし。

二．慰問品の分配をしていた。二十三日は消火と荷運びその他種々の行動をしているのを知った。

感想と覚悟 五年 井垣 鉄郎

かつて震災の経験のない但馬人は、今度の大地震に遭遇して、どう行動すべきか迷ったことは言うまでもなく、ただあわてふためくばかりだった。そうして台所に火災が起こり、莫大な損害および死傷者を出した。

この不幸中においても特に幸いだった被災民は、各地の同情および激励を得て、復興の暁には旧来に倍する盛んな町を造ることを、覚悟していることは疑いない。

かつて豊岡は但馬の都とは言われ〔たが〕、その名を知るのはただ一小部分の者に過ぎなかつた。例えばかつて我々が修学旅行の折に経験したことだが、度々行き先の地方の人に学校名を問われた時、豊岡中学校の名を言っても、だれもうなずく者はなかつた。

しかし震災後の今日であるなら、以前とは異なることは疑いない。否、我々が外国に行ったとしても、彼ら外人すらも但馬の豊岡を知って

いてくれるだろう。

このように我が豊岡が世界的に有名になったことは、実に喜びにたえない次第である。そうして我々が世に出れば、それらの人の同情のあることも疑いない。故に、我々はこの機会を捕らえ、多大な奮闘努力を覚悟する者が多かろう。

我々は現在青春期にある。そうしてこの大震災においても、幸いに命を拾い得たのである。ただ我々はこの光景にむやみに悲嘆することなく、焼け跡に生き残っている草木が萌え出るように、同じ境遇にある我々は大いにこの草木に学び、それに劣らず奮闘努力をすべきである。

この際に当たり家を失い、また財産に至るまで失った我々は、すべての欲も放棄した。そうしてただ一つ最も必要な生命を守り得たことを感謝するとともに、この生命を活用すべきである。否、実際我々はその覚悟を十分に持っていることは疑いない。その心を確かに感ずる時がある。

我々は地震当日のような震災によって、生命を落とした人々を常に目撃した。その度に僕はその人々の死に行くまでの状態を想像した。その人が家の下敷きになって死んで行くまでの苦痛、また現にその苦痛に遭っている人も見ることが多かった。

このような時に我々は、自らの幸いであることを大いに感じた。そうしてそれらの死傷者に対し、憐れみの気持がわいて来る。今その記憶を呼び起こすことは、僕にとって耐え忍ぶことが出来ない。実におののかざるを得ない。

子供を捜す親は実に憐れであった。下敷きにされた自分の最愛の子供を親が見出した時、しかもそれが既に死人であった時、その親は泣いて助けを求めた。その様は実に狂人にも等しかった。

思い出すたびに、いまだに目前にちらつくその悲惨な様は、僕の脳にいつまでもこびりついて離れようがない。悲惨な様は考えるに忍びない。僕は知らず知らずに恐ろしい過去を考えて思考が乱れた。

しかし今の我々は、前に述べたように奮闘することが肝要だ。いつまでもこの気分を忘れず、復興に成功するために大いに努めるべきだ。

行動と日誌

五年 石田益太郎

一．立体幾何の時間に大地震が起きる。無意識のうちに運動場へ避難した。校長先生並びに係の先生より、訓話並びに地震についての注意があった。鳥取一中の選手⁽³⁾の様子も悲惨で、慰めの言葉を知らなかった。寄宿舎の周囲で昼食を取った。

その後岡野先生の命令により一団となって、徳田・前田・片山各先生の家に行き家財道具を引き出した。その後帰舎し、寮母から炊事部についての相談があった。炊事部の係のだれか残って指揮してくれとのことで、しばらく居残った。

その後郡役所の方から炊き出しをさせてくれとのことで、炊事の先生を捜したが見当たらず、校長先生にその用件を聞き、橋本先生とともにまた居残った。その後保証人を見舞い、大物類を荷車に積み込み、本町の別荘へ避難した。

保証人は「この際屋外へ出るのは危険だから、この避難所へとどまるべし」と忠告されたが、私は外の生徒の努力ぶりを見てじっとしていられず、ついに用心の上で駅通りに来て、講習の生徒とともに、自転車屋と思われる倒壊家屋の下敷きとなっている女の二人を出した。外の人はたんに頭を砕かれている様も惨めだった。小学校に負傷者を運んだ。午後六時半まで

手伝った。七時前、父とともに自動車帰宅した。

二．二十四・二十五日 豊岡に来て、親類を見舞い、少し手伝った。

二十六～三十一日午後 自宅の倉・家の壁などを取り除く手伝いをした。

三．講習生の田村・長田さんの二人の、目に見えての努力ぶりは大いに感心し、おのずから涙が出た。

感想と覚悟

五年 石田益太郎

今回の大震災には、だれしも予想外の感じを味わわれたことと思う。そもそも我々但馬人は一般に、震災といえば関東のみと考え違いを持っていた者が、多数を占めていたことは、その震災における光景が明らかに物語っていたものと思う。

「天変地異は世の習い〔＝常〕』とはいえず、天の余りの仕打ちによる惨状に非常に脅かされたものである。自然を大いに憤るに値するものと思う。しかし一方他を考える時、自然もまた役に立って大いに力のあるものである。

天はこの震災地に向かって、「一層の努力と改良を要する」と震災によって知らせ、同時に挫折しない心をだれ彼〔の区別〕なく、大和魂ある日本国民に知らせたのかも知れない。いずれにせよ自然は偉大なものである。今は人間の科学知識が発展したとは言うものの、どのようにして偉大な自然を服従させることが出来ようか。それはこの現在の人生が一回転するまでには出来ないであろう。

私はいつであったか『科学知識』という書物によって、今村博士の地震予測器の発見並びに効用、図解などを目にしたことがある。博士は議会において説明されたとあった。これらは

我々国民が第一に喜ぶべき事実ではある。だが自然というものは地震のみに限らない。

それならば何故にこの但馬・丹後の地震の予知を得られなかったのであろうか。惜しいことだ。わが日本では先年の東京大震災に遭って、初めてその必要であるべきを知り、わずかに三個所に置いたに過ぎないのである。

このようなちょっとしたつまらない事柄によって、金約一億円の国家の富を消滅させ、それどころか富に換えられない数百の人命（かいじん）（＝灰とちり）に帰したことは、実に返す返すも悔しいのである。これにおいても自然の偉大さ、人生の微力さがありありと思い出されるのである。

しかし我々はこのようなことで挫折すべきではない。我々の体内には大和魂という雄々しい血が満ち満ちているのである。復興・発展・一致協同心という血が流れ満ちているのである。我々はこの心身で突進し、困難があるといっても挫折せず、あくまで進撃し、「災いを転じて福となす」の偉人の言葉を吟味し、同時に実行すべきである。

「好機逸すべからず」という言葉を先頭に突き進み、復興へ発展へ。そうして以前より一層の努力と大和魂の現われによって学に努め、光明ある彼岸〔＝理想の世界〕に達せねばならぬのである。

我々はこの大震災に出あっていっそう強固な心、物事に挫折せず、あくまで光明ある境地へ達しようとする心が、大きくなったのをつくづく感ずるのである。自然、人生ともに大きいのである。

行動と日誌

五年 稲垣 馨

一．十一時五十分帰宅。福富・西村と僕の三人

で立野を遠回りして、立野橋を渡って友人杉本君の家をお見舞いした。それから赤江君と三、四人の友人とともに、永井町を歩いて被害の有り様を見た。

ある巡査が「駅前の弁当仕出屋の丸山某家の細君が家の下敷きになっているので、少しの間手を貸してくれ」と言ったから、僕らはその発掘に従事した。その人は死んでいた。

巡査と別れて日下部の所まで来ると、郵便局が焼けていた。それで新屋敷の方へ行くと、渡辺質屋とかの人が「家族が女ばかりなので、済まぬが物品を出して下さい」と言ったから、たんす、行李などを川端へ運んだ。

その時、火がこの家に付くまでにはまだ二～三軒の余裕があった。その隣の家の人の夜具や衣服を出した。その時は二時十分ごろで、「二時半に余震のすごいのが来る」と言って、皆恐れて川へ川へと避難していた。

表崎先生が来られた。余りくたびれたから、本通りに出て休息した。火は中町の辺りに来ていた。それから杉本君の家の畳を十枚ほど出した。本箱などを蔵などに運んであげた。終わってから片山先生・徳田先生の家の家具などを出した。それを終って手押しポンプを一時間ほど押したが、「本家瀧田に皆行け」と表崎先生が言



城崎温泉一の湯付近より御所湯方面

（『城崎町史』704頁より）

われたので、色々の物を運んでキャラメル一個を表崎先生からもらった。腹が減って困った。

西岡の家を片付けに行った。身体がくたびれて何もしたくなかったが、それでも元気を出してやった。小学校へ行った。森脇先生や博物の先生に会って、「寄宿舎に行つて飯を食え」と言われた。その夜、女学校から飯運びをして、十二時過ぎに家に帰った。

二、二十四日 朝から家の修繕。

二十五日 小屋建て。午後、親類訪問。

二十六日 親類訪問。午後、小屋建て。

二十七日 学校に来た。

二十八日 パラック建て。

感想と覚悟

五年 稲垣 馨

「但馬は地震が少ない」と、一般人は余り地震を重視しなかったが、このたびの地震によってそれ〔の誤り〕が認識された。家屋は倒壊し、加えて地震についての知識が乏しいため、火災を起こすなど、それこそ栄華は一炊の〔=短時間のはかない〕夢と化した。そして大損害を被った。

道路および建物から見て僕は次のことをたびたび聞いた。「人が道の真ん中で家の下敷きとなった」と。考えてみれば道路はその市町村、ひいては国家の宝のような物であり、交通上・商業上に大きな利益を与えるものである。この豊岡のような家屋の密集した所においては、このような災害が起こるのも当然であろう。

道路を拡張することはだれも了解し、また実現させようと求めて止まぬのである。しかし豊岡・城崎、殊に城崎においては、道路通行者で下敷きとなった者が多いことには、驚く外はない。この尊い生命を救うためには、我々はこの道路拡張を熱望する次第である。豊岡もこの案

が実現されたと聞き、喜びにたえない。

次に現時、文化住宅などがやかましく唱えられるが、それも実に良いことであろう。しかし現在の日本の住宅で、浴場のみをセメント・レンガなどで柱に密着させて造られた物は、このたびの地震でだめであった。これらは土地に固着しているので、家のみが地震で揺れ、またはのめり出て大災害を被った家が多い。

この点において、今後家を建てる人は西洋式と日本式を〔混合させて〕一緒にやらぬように、あくまで純日本式に造って、この災害を逃れることが肝要である。我々はこの地震国に生存する以上は、この尊い生命を長らえるために、住宅の研究をする〔こと〕が急務である。

行動と日誌 五年 井上 俊郎

一．二十三日 駅通りで倒壊家屋の死人掘り出し。午後一時半ごろ江原まで歩き、午後五時半ごろの汽車で帰宅。翌日午前二時まで一睡もせず起きていた。

二．二十四日 豊岡中学校の手伝い。

二十五日 城崎方面の友人を慰問。

二十六日 頭痛のため午前中寝た。午後、江原へ行った。

二十七日 豊岡中学および小学校の手伝い、避難者の住宅捜し。

二十八～三十一日 自宅にいた。

三．二十三日、駅通りの死人掘り出しの際、黒田鉄工所の職工某君の奮闘振りは、僕の目を引いた。五年級の植木忠・足立鉄雄・橋本勇君らは一生懸命働いていた。殊に橋本君は自分の家の焼失も忘れて働いていた。

感想と覚悟 井上 俊郎

後になって思い起こすと、何だか当日は気持

の悪いどんよりとした日であった。昔から地震の安全地帯として認識されていたわが但馬地方だから、どうしてあんな大地震が来ようなどと思っていよう。地震に火事は付き物だと世間の人は言っているが、実際僕らは真の事実を体験した訳だ。

地震についての認識の浅い但馬人は、この大震災に対処する方法を知らないのみか、むやみに事実無根の流言に捕らわれて、各自の家業も手に付かぬという有り様なのである。

もちろん流言を飛ばす人は悪いに違いない。しかしこれを信ずる人も余りに軽薄ではなからうか。また今日某新聞の誤報なども、都会に行っている人を心から恐れさせるものがあつた。我々は大新聞を大いに信用して通読するのである。今後このようなことのないことを希望するものである。

まだ今になってどこが本当の震源地か、明白には分からない人々が沢山いる。僕もその一人である。地震学は現在の僕から見ると、余り進歩していないようである。もう少し偉い人物を我々同輩の中から出したいものである。

地方の青年団員・軍人・警官らの奮闘、および飛行機の飛来などは大いに我々を元気づけた。我々はこれらの人々に向かって、大きな謝意を表わさねばならない。

もはや大震災は過ぎた。至る所、復興の気持がみなぎっている。我々はむやみに悲嘆に暮れてよからうか。我々是一个の男子ではないか。このような女々しい悲嘆、失望を捨てて前進しなければならない。

我々青年の前途は遠^{りよう}遠〔＝はるかに遠い〕だ。我々は猛進せねばならぬ。新たな光明に向かつて。そうして大但馬国を建設し、そうして聖上陛下・皇后陛下に、その御深憂の百万分の一で

も補ない申さねば、わが但馬人の責務は終えないのである。

この大但馬の国の建設はだれの務めか？ 言わずとも知れた全但馬人の務めである。しかし来るべき復興の世の中堅人物はだれか？ その責務は今や我々青年の双肩に掛かろうとしている。

我らは何時までも眠ってはいはだめだ。大地震は我らを揺さぶって目覚めを促してくれたのである。いま我々はこの大震災によって目覚めたのだ。これまでのように浮薄でなく、勉学に事業に、真実をもって向かわねばならない。

永久に忘れ得ない五月二十三日午前十一時十分、この日この時間こそ、我ら但馬人の目覚めの機会である。見渡せば焦土の中に、新しいバラックが復興の先駆を誇っている。

(1) なお編集作業に当たって、本学部卒業生の福田全志、藤岡伸行、天平佳香、長尾正子、斎藤明子、井上大輔の各君に協力をしてもらった。なお71周年の豊岡での座談会開催にも、長尾・斎藤両君の協力を得た。

(2) 宇佐美龍夫著『新編 日本被害地震総覧』（東京大学出版会、1987年）においては「北但馬地震」「北丹後地震」と命名されているが、地元の通称に従って本連載では「北但地震」「北但震災」および「奥丹後地震」「奥丹後震災」という呼称を用いることとする。

(3) 震災当時、鳥取第一中学校（現・鳥取西高）の庭球部員13名が来訪していて、豊岡中と交流試合を行っていた。

その詳細は鈴木義信「震災に直面して」（鳥取一中の校誌『鳥域』第45号、刊行年が記載されていないが前号、次号との関係から、1925年刊行と推定される）に掲載されている。別の機会に全文を紹介する予定である。

**Students who participated in relief activities after a disastrous earthquake:
Discovery of a collection of essays on the Hokutan-Earthquake of 1925
by students of Toyooka Middle School**

Jun'ichi FUKAI *

Hideki KISHIDA **

Abstract: In 1925, a strong earthquake (Hokutan-Shinsai) struck the northern area with of the Tajima region, including Toyooka-cho and Kinosaki-cho, and caused great damage to these communities. Thereafter, many students of Toyooka Middle School (now Toyooka High School) participated in relief activities, such as rescuing people and property. The main purpose of this paper is to introduce a collection of essays on Hokutan-Shinsai by 596 students of Toyooka Middle School. The introduction of these essays will make the following two contributions:

provide information on earthquake damage, earthquake relief activities, and restoration of small-and medium-sized communities, for the purpose of comparative analysis, such as with the Hanshin-Awaji Earthquake;

aid studies on adolescent voluntary relief activities, including rescuing people in disasters.

* Professor of the Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University

** Part-time Lecturer in Ritsumeikan University